

ふるさと、風

第62号 (2011年7月)

風に吹かれて (41)

白井啓治

『拭ってもぬぐっても額の汗』

未だ梅雨明けもしていないのに³⁵度を超す猛暑がやって来るなんていったらどうということなのだろうか。地球の何処かでは極寒がやってきているのだろうか。そうでないとバランスがとれず、絶望的な温暖化で生物が絶滅してしまうだろう。

5月には今年はどうも冷夏らしいと思われたのであるが、6月には一転して35度を超す暑さなのだからこれはもう異常気象と説明するよりも驕った人間どもへの天罰ともしかないのではないだろうか。

関東東北大震災を天罰と認識した方がいいと発言をして輿論を買った人がいたが、福島原発事故に関して言えば天災の仕業とは言い難いものがあり、当に天罰と言ってよいものであると思う。神の存在そのものが人間の最大最高の創造の産物であるが、その神の下された罰はいわゆる天罰であり、天罰とは即ち人災の事をいふと言えるであらう。

福島原発事故を想定外の災害として、この夏には節電を強要されている。原子力発電所が稼働できなくなったから電気が足りないのだという。勿

論電力消費の平準化のための節電は必要なことであるが、原発ストップの為に節電という事は論外なことである。電気事業法の改正などによって、一般消費電力の過剰な節電は十分回避できるのである。

原発事故問題に対して「騙された」という人たちが大勢いる。しかし、騙されたという前に、自分は世論を金で売ったのではないかと、自分を顧みることをした人が果たして何人いたのだろうかと思う。

世論の大半が反対であれば原発推進はなかった筈である。原発を始めるにしてもっと厳格なりスクマネジメントがあつたであらうと思う。世論を金で買おうとした者と売ろうとした者が居たから現状があるのだ。そしてさらに救いようのないことは、その時は反対だった、を免罪符にしている者の実に多いことである。世論を金で動かしたかどうかは別にして、民主主義というものは少数の正しき反対者であっても、多数決に負けたら自分も間違つたことに賛成したという事になるのだ。

暑さの中、こんなことを思いながら現実を眺めていたら、どうも我々日本人は、何でも与えられることに慣らされ過ぎて馬鹿になってしまったように思えてきた。挙句の果て、ゴネれば与えられ

ると錯覚を起こし、自分で学び創造することの喜びを何処かに捨ててきたとしか思えない。

6月17日、18日の3日間、ふるさと風の会5周年展とことば座の公演が行われた。その中で、風の塾の「朗読教室」の発表会が行われ、兼平良雄さんが生涯学習として平家物語を語つたのであったが、その時の観客の感想に、古典なのでよく解らないので映像で文章を写してくれると解りやすい、などというのがあつた。朗読の指導をしている小生としては、こんな事を言う人はもう来てくれなくても良い、と言いたい。小生、脚本家であり演出家でもあるのだが、能の舞台などを観に出かけるときは解っているものでも必ず下調べをしていく。そうしないと楽しむことができないからである。

外国からのオペラの公演などを観に行く時にも必ず再確認してから行く。それが観客としてあるべき姿だからである。観劇というのは演者と観客の真剣勝負であり、演者、観客の双方がガチンコで、がっぷり四つに組むことで演劇という世界を楽しむことができるのである。

小生はテレビが嫌いだったのでテレビドラマの仕事はしなかったが、嫌いな要因を象徴するような事に、「このドラマはフィクションであり事実ではありません」などのテロップを最後につけることが挙げられる。クレーマー対策であろうが、正直馬鹿馬鹿しくてやってられない。その事自体は作品の内容に直接影響を与えるものではないが、馬鹿馬鹿しいことである。テレビドラマにいうのではなくそういう体質のメディア会社と仕事をしたくなかったからである。

平家物語の朗読を聞きに来て、台本がテロップ

で映し出すような工夫が欲しかったという。これを「工夫」と言ってもらいたくない。これも与えられ過ぎの、悪影響であろう。悲しくなる。

文句の言い方でなので、もう一つ文句を言わせてもらおう。テレビを見ていたら、こんな事を言っていた。今回の地震災害に関する子供達の作文を紹介するもので、著名な教育者らしき人の曰く、「この子供の文は、飾り気のない素朴で素直なところが良い」と解説をしていた。馬鹿馬鹿しくて話を聞いていられなかった。その子供の文章を紹介することはできないが、その子の人間像が思い起こされる良い文章ではあった。しかし、その文章に飾り気のないと評した人の気が知れないものであった。その子供なりの十分な飾りが込められた文章であった。だから稚拙ではあるが感動を呼び起こす力を持っていた。

文章というのは、自分を表現するための形容詞なのだから、表現というその人らしい飾りがなければ人の心を打つ文章にはならない。もしその子の作文にその子の飾りの表現の言葉がなかったら、ただの説明文で感動も減ったくれもない。子供の文章だから素朴で素直と言えば良いと決め込んでよせば良いのに飾り気のない、など余計な事を言ったおかげで、解説者のボロが丸見えになってしまった。情けない我が国の政治家どもと全く同じ無様であった。

当「ふるさと風」の会報を反動的と評した馬鹿な奴がいたそうであるが、こんなことを書いていると理解力のないそういう者達から、またまた反動的と言われるかもしれない。だが、そう評した人は反動的という言葉の意味が分かって使っているのだろうか、といささか首をかしげてしまう。

反動的というのは「自分と意見が違う」という意味で使う言葉ではないのだが。

雑学 スバル

鈴木 健

前号の拙文を読まれた方から、スバルの語源についてのご質問をいただきました。にわか仕立てのうえ、借り物、請け売り満載ですが、皆様のご指導をお待ちいたしております。

私のマイカー歴は四十五年前、同僚から譲り受けたスバル³⁶⁰に始まります。当時は、垢抜けした名前のスバルという意味も、夢を誘うようなデザインの六つ星のマークの由来もわからないまま、すっかり気に入っていました。

しかし、農家の方たちには、夜空に六つの星が一カ所にかたまっているそれが目につきやすかったのでしょうか。むづら(六連、六つ星、六地藏、群がり星、寄り合い星、鈴なり星、ごちやごちや星などと呼んで親しんでいたようです。沖縄八重山地方の波照間島ではスバルをムルプシ(群れ星)といい、五穀の農作業に欠かせない星で、それが東の空に姿を現す十一月初めごろに麦の種まきを始める。同じく石垣島には星見石があり、スバルやオリオンとその石の上端を結ぶ線の仰角で稲や粟の種まきの時期を決めたという。石垣島の隣にある竹富島の星見石は中央に小穴があき、この穴から日没後にスバルが見えた時季に(立冬の頃)に種まきをしたと伝えられ、竹富島西方の小浜島にはスバルを観測したとされる節さだめ石があります。長野・山梨地方では星が一升杓にあふれるほ

どむらがついているところからそれを一升星と言ったし、スバルが南中するころ夜が開ける二百十日前後にそばを蒔くともっとも実りが多くなり、一升の種ソバで八合の粉が挽けるということで、**すばる満時**(マンドキ粉八合という里言葉もあり、**すばる満時夜が明ける**とか、**すばるの山入り麦まきの旬**(陰曆十月中旬か)などと農事の頼りにされています。また、六つの星を羽子板に見立てた羽子板星、東北地方などでは灸のもぐさか、雑草が一カ所に生えたように見えることからか、お草星と呼ばれてたりしています。北原白秋も「出たよ、草星、おらちゃん」と見てた、背戸のよこつちよの川岸でよ出たね、あの晩、やなぎの絮(ワタ)のふりはりはりが白かったよ」と歌っています。

漁に出る人たちの間では、近畿中国地方で陰曆十月中旬ごろ、夜明け前のスバルが西に沈むころに吹く東風を**星の入り東風(ごち)**、静岡の田方郡などではスバルが西の山に沈む頃、海が風いでもっともしずかになることから、**入あい風**という言葉も使われています。

西洋でも「アトラスの娘たちプレアデス(スバルのこと)昇りつつあらば、収穫を始め、沈まんとする頃は耕作を始めよ」(シオドス・農作と日々)とスバルが農耕のカレンダーや時計として使われたようです。

ここで「アトラスの娘たちプレアデス」とい言葉が出てきました。冬の代表的星座のひとつに、一月下旬の夜八時ごろ、ほぼ頭の真上に見える牡牛座があります。プレアデス星団つまりスバルは、その牡牛の肩先に見える星団で、肉眼では六個の星が天空の片隅に集まっているように見えますが、実際には一三〇個の若い星の群れだそうです。神

話でプレアデスは、天を担ぐアトラスの七人姉妹といわれ、個々の星にはアルキオネ、エレクトラ、メロペ等の名がついていますが、肉眼では六個しか見えません。それは、そのなかのメロペが、自分だけ人間の妻になったことを恥じて姿を消したためとか、トロイの街が崩壊するのをなげき悲しみ、エレクトラが彗星となって姿を消したためといわれます。それ以来、残った六人の姉妹は、冬の夜空の片隅で、寄り添うように集まって泣きぬやけているのはそのためだとされています。

和名のスバルが始めて登場するのは、九三四年ごろの『和名抄』(源順)。そこには「昴星・・和名 須波流(スバル)・・六星」とあります。一〇〇〇年ごろの『枕草子』(清少納言)にも「星はすばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしおかし。」という一節があり、星といえは先ずスバル。よばひ星というのもあるがおもしろい。と言っています。なお、淡路島、播磨、瀬戸内、徳島などではスマルと言っています。古の『古事記』や『日本書紀』にも、糸でつないだ球飾りの名として、御統(ミスマル)が記されています。「澄んだ闇の空をのぼって来て、銀糸にからみつけた蛍の一むれのようにちらつく」と、テニスンが形容したスバルに重なります。

スバルの語源について私はつぎのように考えています。

アイヌ語に【chup(チュプ)】【chupu(チュプ)】があります。日本語にアイヌ語から派生したと思われる語がある場合、お互いに接触のなかった地域、交流のなかった時代のそれはアイヌ語ではなく縄文語からの引継ぎであるというのが、私の主

張です。そこから、右の日本語のツボむ、ツボめるは発音も意味も縄文語チュプの受け継ぎと考えます。そして、古代語や地域語に見えるツブ(丸・粒、壘、つぼみ、巻貝)、ツボ(壘、つぼみ、巻貝)、ツンボ(耳つぼまり)、ツビ(女陰、巻貝)、ツベ(尻)、チビ(尻、幼児)、チボ/チヨボ(つぼみ、乳房、チンポ(乳房、幼児の蛇口)チュブラメ/ツブラメ(かたつむり)、ツブロ(ひょうたん)、ツボロ(かたつむり、ひょうたん)。目をツブる/ツブす、ツボンでいる(引っ込んでいなさい)、ツバめる(集める、まとめる)、チヒさし、おチヨボロ。bomで、ツむ(摘む)ツマ(爪)、ツمام、ツムぐ(紡ぐ・繊維を摘まみ、まとめてより合せる)、ツメる(つねる、詰める)などもその派生語でしょう。また、ツボミにしても、【chupu(チュプ)】【muye包み→muふさがっているもの】で、その muye は日本語になつて moya モユエ(東北・越後 芽・木の芽) からメ(芽)、モユ(萌ユ)、モヤシ(萌ヤシ)。ミドリ(古代 草木の新芽、沖縄 芽・新芽、神奈川 松の新芽。それらが色名に転じた。みどり子)も語源は【muye包み→芽】【uri 伸びる】でしょう。

道草をしてみましたがつぼむ、つぼめ(む)るは↓sの転音でスボム、スボメ(ム)ルになります。それは窄(ス)ブ・窄(ス)バル(すぼめる、ちぢめる、あつめる)、統(ス)ブ・統(ス)バル(たばねくる、ばらばらのものをまとめる)という語を派生しました。星のスバルにはこの窄バルと統バルの二つの意味があったのではないのでしょうか。というより、二つの意味に分化する前のスバルだったのではないのでしょうか。つまりそれは、ばらばらなものを持ちめ、壘のようなもののなかにあつめ、まとめたものということだと思われま

話はマイカーのスバルにもどります。戦争中有名な零戦を作っていた中嶋飛行機は戦後富士産業として再出発しましたが、財閥解体で十二社に分割されました。そのうちの東京富士産業、富士自動車工業、富士工業、大宮富士工業、宇都宮車両の五社が共同出資して富士重工を設立し、そこへ吸収合併する形でいまの富士重工が成立しました。六つの企業体の集合体をスバル(六連星)になぞらえてスバルの愛称とマークを作ったのですが、現在のマークの右下の小さい五星はその五社を、左上の大きい星はその統合体である富士重工を表しているものと理解されます。

スバルはまた、宮沢賢治の童話『ナメトコ山の熊』に顔をみせます。ナメトコは縄文語で【nann 冷たい】【mem 泉】のある【ruk 小山】／【tok 突起】でしょう。(ちなみに『常陸国風土記』に見える行方(ナメカタ)は縄文語の【nannem 冷泉】【ka ほたるの】【ta とろろ】と解され、ほぼその場所の見当はついています。)

熊の肝と皮は結構な値段で売れるので、小十郎は「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。」「仕方なしに猟師なんぞしてるんだ。」といながら片っ端から熊を殺していた。冬のある日、大きな熊が両足で立ってかかって来たので、小十郎は落ち着いて鉄砲を構えた。「ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞こえた。」「ど思うと小十郎はがんと頭が鳴ってまわりがいちめんまつ青になった。それから遠くでこういいう言葉を聞いた。「おお 小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」「それから三日目の晩だった。まるで氷の玉のような月がそらにかかっていた。雪は青白く明るく氷は燐光をあげていた。すばるや参(からすき)の星

（オリオン座の三つ星）が緑や橙（だいだい）にちらちらして呼吸をするように見えた。その栗の木と白い雪の峰々にかこまれた山の上の平に黒い大きなものがたくさん環になって集まっておのおの黒い影を置き「じつと雪にひれふしたままいつまでもいつまでも動かなかった。そしてその雪と月のあかりで見るといちばん高いとこに小十郎の死骸が半分座ったようになって置かれていた。」

アイヌは熊を殺す時、「**Jonante 熊送り**」それを **oman** 行く【**おさせる**】という祭りをしますが、ここでは熊が小十郎のイオマンテをしたのです。小十郎は人間を、熊は自然界を表すと見たいのです。自然を壊した人間は自然に殺される。空には送り人のスバルが輝いている。『昂・すばる』では、

「ああ 砕け散る宿命の星たちよ せめて密やかにこの身を照らせよ 我は行く 蒼白き類のままでは行く さらば昂よ…ああ さんざめく 名も無き星たちよ せめて鮮やかに その身を終われよ…」とスバルの臨終を人間が見送るが、現実には人間が死に絶えてもスバルは蒼白く輝き続けているのです。スバルは生誕後十億年という若い星らしいが、あと百億年近く輝き続けるとか。四一〇光年という近いところから人間のあさましきさを見届け、最後は砕け散るか消え入るかでその身を終わらせることになるでしょう。なお一光年は光速三十万キロの光が一年間に進む距離、九兆五千億キロ。アンドロメダは地球から二百三十万光年。牽牛が天の川の対岸の織女にピカッとウインクを送ってから、そのお返しが届くまで六〇年とか。地上では待ち切れないが、宇宙ではほんの一瞬です。

『想定外』とは

菅原茂美

今回の東日本大震災の報道で、「想定外」という言葉を何度も聞かされた。そもそも「想定外」とは何事？ あれもこれも、想定外の一言で済ませてよいのか？

想定外の事故とは、事業を企画するとき、将来起こりうる危険の規模が、結果的に、その想定を外れ、大事に至ること。あらゆることを想定し、万全の体制で事にあたれば防げたものが、認識不足で甘かったりすると、とんでもない結果を招く。大方の想定外の事故とは、起こりうる危険性について、「無知」であるか、或いは分かっているにもかかわらず「見くびる」かのいずれかであろう。

そしてあつてはならないことは、利益をまず優先し人命は二の次で、資本投下とその効果に主眼を置く。言いかえれば、自然の脅威を過小評価し、軽く「見くびる」。大方の重大事故は、そういう傲慢な判断によつて、ひき起こされると私は思う。

自然の脅威は、長い歴史を振り返ってみれば、科学の進歩した今日では、知らなかったでは済まされない。巨大津波の歴史は、内陸奥深くまで海の砂やヘドロが、地層にしっかりと刻印されている。古文書調べや発掘調査をすれば、十分に「想定」ができるはず。もし、事故でも起きたら、周辺住民に、莫大な被害をもたらすような大事業なら、なお一層、周到な準備が必要である。

今回の原発事故を引き起こした直接原因となった津波の規模は、仙台平野の名取市では、内陸最深部6kmまで侵襲した。V字地形の宮古市姉吉地区では遡上高40・5mにも達した。しかし、かつて同地区を襲った、明治三陸地震（1896年、推

定マグニチュードM8・4の津波の遡上高は38・2mもあつたし、1142年前の貞観（じょうがん）地震（推定M8・4）でも、巨大津波により、壊滅的被害を受けたと古文書に記されている。これらの事実を元に、2年前の夏、産業技術総研・活断層地震研究センター長・岡村行信氏が、東京電力福島原発の地震津波対策に対し、その不備を厳しく指摘していたという。しかし東電と政府は、津波の高さを5・7mに設定し、科学者の意見を無視した。ところが実際はM9で、15mの津波に襲われ、冷却装置が破損し、水素爆発を起こしてレベル7の最悪の事態となった。創り上げられた安全神話は虚構であつた。そしていざ事故が起きてみれば、東電も政府も「想定外」と責任逃れの言い訳だらけ。米国の緊急支援の申し出を断る。国際問題に発展することが見え見えなのに、事故の重大さの認識が甘い。50歳代の酪農家は、牛の処分を余儀なくされ、『原発事故さえなかつたら…』と書き置きし自殺した。

【地球温暖化防止のため、原子力発電は重要な手段である。日本では原発54基で、全発電量の29%を賄っている。しかし、ドイツは、今回の日本の事例を契機に、国策として脱原発を決定し、イタリアは国民投票で94%が脱原発を表示。スイスも原発廃止の意向。しかし、これらの国々には、フランスから原発による電力を輸入する矛盾がある。原発に代わる再生可能（クリーンエネルギー）な発電は、不安定で、原発の穴埋めには、ほど遠い。さりとて火力発電は、生産コストが高すぎるし、環境汚染につながる。無限の難問だ。

菅総理は、日本で1000万戸の屋根に太陽光発電。パネルを取り付けると、G8の国際会議場で

啖呵を切ったが、関係閣僚さえ、その可能性はかなり危うく、夢物語の「想定」と言っている。

かつての永年与党の軽率な政策（不十分な事故防止策）で原発事業を推進してきたのに、今、事故が起きてみれば、あたかも現与党の責任であるかのごとく振る舞って、内閣不信任案を提出するなど、国会を空転させている。事もあろうに、与野党一致協力での未曾有の国難に対処すべき時に、国政に空白を作った責任は、万死に値する。特に内閣不信任案提出の賛成演説など、自分達がまた種なのに、ヘドがでるような悪態の連続。あれでは、まるで国会議事堂そのものが、カボチャ頭の瓦礫の山と同じだ。こんな醜い政局争いなどしている「偽選良」を選んだ国民にも責任はあるが、醜態きわまらない「想定外」の国会風景には、超うんざりだ。】

原子力発電所など巨大事業は、もし深刻な事故（シビアアクシデント）が発生すれば、かつての旧ソ連チエルノヴィリ原発事故（1986年・国際放射能事故評価レベル7）の悲惨な歴史があるので、建設に当たっては、いかほど慎重過ぎても、重すぎはしない。それなのに、本来、第三者機関として監視役であるべきはずの原子力安全保安院が、事もあろうに原発推進担当省庁に所属している。新聞報道によると、ブレーキを軽くかけながら、膨大な予算でアクセルを目一杯ふかしている（天下り企業保護？）。文字通り「国策民営」である。省庁・電力会社・原発メーカー・御用学者がみんなグルになった閉鎖性の「もたれ合い」体制だという。このことは国際原子力機関（IAEA）から「独立性と役割の明確化が必要」と、強く改善を指摘されているが、歴代内閣は全く知らんぷり。かつての原子力船「む

つ」も、「もんじゅ」も、東海村の「臨界事故」も、全く教訓として生かされていない。そういう体質が、今回、科学者の意見を聞き入れず、想定津波の高さを低く設定するなど、いわゆる「安全性過大評価・リスク過少評価」の不合理システムを温存したと言われる。

【25年前のチエルノヴィリ原発事故で強制移住させられた人々は、補償金を払えばそれでよいというものではない。故郷を失った喪失感に精神を病み、うつ病、アル中、自殺が増え、現在もお悲惨な状態だという。そもそも、旧ソ連の発表によれば原発事故による死者数は31人とされているが、現在のウクライナ政府は、4000人と言っている。当初ソ連は事故発生を公表せず、外国の指摘で初めて明らかにする次第であった。

1987年私はニュージーランドを旅した時、観光バスの車窓から遠方に、ずいぶん背の高い羊が多数飼われているな...と思った。所が近づいてみるとそれは羊ではなく鹿であった。理由を尋ねてみると、北欧諸国の原住民は、トナカイの肉を食料にしているが、そのエサであるコケが放射能汚染で、幼い子や若者にトナカイの肉は食べさせられない。そのため、鹿を肥育して契約輸出しているのだという。それでも老人などは、汚染しているトナカイの肉を食べざるを得ないのだという。なんとも、悲しくも、恐ろしい話であった。】

さて、今回の巨大地震を受けて、4枚のプレートが押し合い・へし合う日本列島は、今後、どんな事態が「想定」されるのであろうか？

6月9日、政府の地震調査委員会の公表によれば、M9の東日本大地震で、日本列島は東西に引

つ張る強い力が働いた。国内106の主要活断層を解析した結果、3活断層で大きな地震が発生する可能性が高まったという。それは①立川断層帯（東京都・埼玉県）でM7.4程度。②双葉断層（宮城県・福島県、福島第一原発の北30km）でM6.8〜7.5程度。③糸魚川―静岡構造線活断層の中部付近（長野県・山梨県）で、M8程度の地震が発生する可能性が急に高まったという。

前月号でも書いたが、869年の三陸沖「貞観地震」（推定M8.4では、その前後で富士山噴火（864年）、鳥海山噴火（871年）、南海地震（887年）などが連発し、貞観時代に十数回も巨大地震や火山噴火が連発したという。このことから今回の東日本大地震が、1100年という期間を一つの「周期」と考えるならば、今後、巨大地震連発の糸口にならなければ良いが...との懸念がもたれている。東海地震や南海地震など連発しようものなら、正に「日本列島沈没」である。

特に東京圏は、3500万人が居住する世界最大の大街区であり、直下型又は近海でのM8クラス以上の地震や、それに伴う大津波が発生しようものなら、巨大な地下街を含む低地は、いったいどうなることやら...このような「想定」は、是非、外れてくれることを祈るばかりである。

さて、「想定」を設定しようにも、現在の人類の地識では計り知れない自然災害もある。例えば、巨大隕石や小惑星の飛来である。火星と木星の間には、一個の惑星になり損ねた膨大な数の小惑星のベルトがあるが、他の天体の引力バランスが崩れたりすると、弾き飛ばされる小惑星や巨大隕石などが、この地球までやってきて、想像を絶する

災害をもたらす。今から6.500万年前、中米ユカタン半島に、直径10kmの小惑星が衝突してきて、全盛を誇っていた恐竜を絶滅させた。そして直径200kmのクレーターから、天空に舞い上がった塵芥は何十年間も、太陽光線の十分な地上到達を妨げ、植物も枯れ果て、ほぼ90%の生物が絶滅した。5億年前のカンブリア紀以来、このような大量絶滅事件は5回も繰り返されている。

他人の不幸のおかげで…という大変だが、恐竜絶滅のおかげで、あいた空間(ニッチ)に、生き残ったネズミ大のチヨロチヨロしていた哺乳類の元祖が、一気に進化を爆発。我ら霊長類の祖先も、モグラの類の「食虫目」から分化し、今日の繁栄を築き上げることができた。「想定外」というと、大方ネガティブな結果しか招かないが、このような「たなぼた」も時には存在する。一方、火山噴火やスーパーブルーム(マグマの同時多発噴出)など、人類は何度も絶滅の危機を乗り越えては立ち上がり、今日の繁栄に至っている。

更に3億年かけて、我が太陽は、渦巻型の「天の川銀河」の中心を周回するが、その間に、遭遇する色々な天体の影響を受けて、地球軌道に微妙な変化を生じる。太陽からの距離や公転軌道に対する地軸の傾きに変化を生じ、太陽の活動周期なども影響し、極端な寒冷期を迎えたり、逆に温暖期を迎えたりする。地球上の水分が、広範囲にわたり凍結したり、極地や高山の氷河が溶解すれば、海水面は100メートル以上上下する。そのつど、地球上の生物は、興亡を繰り返し、その時の環境に適応できたもののみが生き残った。このような自然現象は、とても人知の及ぶところではない。

更に人類の生存に直接影響を与える「パンデミ

ック」(世界流行病)などの襲撃は、正に「想定外」。1918年のスペインかぜがそのいい例だ。このインフルエンザで、全世界でおよそ4000万人が死亡し第一次世界大戦に大きな影響を与えた。そして天然痘(痘瘡)は高死亡率だが、1980年にWHO(世界保健機構)は、本病の世界終息宣言を出した。しかし、どこかにこのウイルスが生き残っていて、再び暴れ出そうものなら、免疫のない世界中の若い世代は、抵抗のすべがない。そして、このウイルスが、もしバイオテロに悪用されようものなら万事休す。

更には、エマーゾング感染症(新興感染症)と言って、かつて知られていなかった新しい重大な感染症と、既知の感染症だがほとんど問題なくなつたものが再び勢力を盛り返し、重大な被害をもたらす感染症を合わせて総称する。エマーゾング感染症の主たるものはウイルスで、しかも「人獣共通感染症」が多い。これらは本来野生動物に寄生して静かにしているものだが、その野生動物をウイルスが殺してしまつてはウイルス自身も子孫を残せない。ところが人間活動で、森林破壊や野生動物のペット化など、一たび人類に感染しようものなら、たちまちキラーウイルスに変身して、その殺傷力は強大なものとなる。その最たるものは、エボラ出血熱で、1990年代、医学実験用に捕獲したアフリカの野生の猿が感染源であった。感染を受けた人間の死亡率は、90%にも達した。その他、紙数の関係で詳細は省くがマールブルク病、ラッサ熱、リフトバレー熱、ハンタウイルス症候群、ニパウイルス感染症、ウエストナイル熱、SARS、そしてエイズなどなど。自然界に逆らつた人間活動は、不測の事態を引き起こす。

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

- 7月24日(日)ディアンジェロ・シシリア&シシリア真理子
- 7月31日(日)A.R.C.タンゴ・コンサート
- 9月4日(日)大萩康司 ギター・リサイタル
- 9月11日(日)里山と風の音コンサート
- 9月18日(日)チャン・ディンゴ ギター・リサイタル
- 10月2日(日)長谷川きよしコンサート
- 10月9日(日)小川由美子&SONOROSAジョイントコンサート
- 10月23日(日)小原聖子モデルコンサート&マスタークラス・ワルツン
- 10月29日(日)フラヴィオ・クッキ ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな
雑木林に一滴みの土を分けてもらい、
自分の風の声を「ふるさとの風景」に
唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味を
お持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

さて、人類だけが進化のイニシアティブを勝ち取ったとするのは、傲慢もいいところ。とにかく、

今日まで生き残っている全ての生物は、これまでの過酷な環境の変化を乗り切った優等生なのだ。温血に進化した哺乳類や鳥類だけが、進化レースの勝者ではない。人類から見たら、多細胞にさえ進化できなかったレースの落ちこぼれみたいな、バクテリアに今、人類の未来は戦々恐々である。

【いずれ人類は、人口コントロールができず、過剰人口のため、環境汚染は一層進み、資源は枯渇して、世界の各地にイザコザが発生し、哀れな末路を迎えることであろう。活力を失った人類は、弱り目に祟り目、軽蔑していた「バイキン」に逆襲を食らい、終末はそんなに遠くはないだろう。

人類が病原菌を退治するために、優れた抗生物質を發明すれば、バクテリアは、直ぐに変身して、その対抗策に出る。即ち「多剤耐性菌」の登場である。次々抗生物質を發明しても、敵はあざ笑うかのごとくその先を行く。人類が調子込んで地球環境を汚染破壊し、資源を枯渇させ、生存活力を失いかけたら、「想定外」の病原菌に、一気に止めを刺される可能性がある。地球の生命は、多細胞の生物が全滅した後、単細胞の生物が、一から、やり直しの進化のレースが始まることだろう。】

そして究極の「想定外」は、戦争好きの地球人ならずぐ思い浮かぶ「宇宙人の襲来」。それはSF小説の読み過ぎ。そんなアホなことは到底起こりっこない。なぜなら、星間移動など、ただ事ではないからだ。宇宙人が攻めてくる可能性を、逆にこちらから攻めて行く設定に置きかえると次のようになる。まずロケットで地球を脱出するには、

秒速7・9 km、太陽系を脱出するには16・7 km

のスピードが必要である。即ち太陽系を脱出して他の恒星の惑星に向かうとしたら、マッハ50のロケットに乗らなければならない。我が天の川銀河の直径は10万光年だが、最も近いお隣の銀河はアンドロメダ銀河(230万光年)である。超特急の銀河鉄道でも、230万光年は遠すぎる。仮に、

我が銀河系内のわずか1光年(秒速30万kmで光が1年間に進む距離)ほどの星を目指すとしても、その距離は、9兆4600億km。マッハ50(マッハ1は秒速約331m)の速度で割れば、片道1万8千年以上かかる。到着後、とんぼ返りしても往復3万6千384年かかる。

1世代25年としても、ロケットの中で、子孫が代を重ねて、1455代。近親交配を避けるため多数の男女(最低500人必要。3~4代重ねると機内は3千人ぐらになる。)が、どんな大きいロケットか知らないが、燃料・食料・生活物資・武器等を積んで乗れますか? もし途方もなく文明が進歩した宇宙人がいたとしても、今のべた幻のロケットは、所詮、夢物語。そんなことまでして、こんな地球などに攻めて来て何のメリットがありますか? そんな愚かな行動を取る宇宙人など、いるはずがない。そんな、アホな「想定外」など、空想する方がどうかしている。

人知の及ばぬ「想定外」の災害はともかくとして、慎重に事を運べば防げる人災は、叡智を結集して、何がなんでも防がなければならない。

「流海の舞」が終って

小林幸枝

6月17日から19日の三日間、ことば座第20回定期公演「常世の国の恋物語第27話・流海の舞」の公演が行われた。今回はモダンバレエの柏木久美子さんと共演させていただきました。柏木さんとの共演は二度目になりますが、ギター文化館での共演は初めての事だったので大変緊張しました。柏木さんとのきっかけを作っていただきました美浦村の劇団「宙の会」を主宰されている市川様からは、お褒めの言葉を頂き大変うれしく思いました。その日は、初日だったので特に緊張して体が硬く思うような舞いが出来なかつたのですが、市川さんの良かつたですよ、の言葉に大いに自信を持つことができました。

未来を予言する戯れ詩を劇の冒頭に柏木さんと舞うのですが、美の競演というか美のバトルというのか、自分では初めての体験、体感がありとても面白く、素晴らしい勉強をさせていただきました。いつも見に来てくれる人から、今回は特に感動しましたと言われ、これも大先輩の柏木さんのお力と、改めてプロの大きさを感しました。

二日目は、一日目が力が入り過ぎて思うような舞いが出来なかつたので、力を抜いてと思つたら、逆に緊張感のない緩んだ舞になってしまいました。では納得のいかない舞台となってしまいました。

この日は、中学時代の英語の先生が観に来てくれており、三年ぶりに観たけれどすごく成長しましたねと言われました。手話の表現が柔らかく大きくなつて、自然な舞表現になつていてびっくりしましたと言われました。

三日目は、自分では最高の舞が出来たと感じて

いましたが、白井先生からも今日は良い出来でしたと言われました。この日は、霞ヶ浦壘学校の寮母さんだった方が三年ぶりに来て下さり、大変感動してくださり、大泣きに泣きながら喜んでくださいました。

三日間概ね確りとした緊張と集中力を保ち演じ切ることができましたが、これも柏木久美子さんのお蔭であったと感謝しております。今迄は一人で舞うことしかありませんでしたが、こうして二人で舞ってみて、舞うことの楽しさが一層大きく感じることができるようになりました。また何処かで柏木さんとは共演することができたらいいなと願っております。

11月の定期公演がくると丸五年間が過ぎることになります。11月公演では、また新しい形での舞台を作ることになると言われており、楽しみにしております。これからも応援よろしくお願いいたします。

ふるさと風の会五周年記念展と ことば座第二十回定期公演 兼平ちえこ

当会報紙でもお伝えしてきました、ふるさと風の会五周年記念展とことば座第二十回定期公演「流海(うみ)の舞」はお陰様をもちまして、六月十七、十八、十九日と三日間の予定を無事終了する事が出来ました。

六月というなにかと行事の多い時期にご都合つけて下さりご来場いただいた皆様には心から御礼申しあげます。会員一同大きな励みと喜び

を頂きました。有難うございました。

会場になりましたギター文化館は、特にクラシックギターを愛する方々には、そのメッカとして外国からそして日本全国から多くの方々がお来館している。ギターを形どったドーム式の会館は四方を山々に囲まれた、のどかな田園風景の中に溶け込んでいる。眼下に青田を望み、淡いみどり色とピンク色に染められていたはずの山々は深い緑色に染め変えられていた。

会場は半円形の舞台を中心にして客席も半円に添って四段位におかれている。そこを囲む数本のコンクリート製円柱の他は全て、木材での仕上げで、木の温もりが優しく迎えてくれる。

まず前日の十六日の夕方から会場作りがはじまります。半円形の客席の周りにある数本の円柱の外側に美術担当の小林一男さんの飾り簾が備え付けられる。

そしてその簾に五年間の活動の足跡の展示、続いて平成十九年から挑戦してきた「常世の国の五百相」、五百人の面相をとくろ狭しと飾る。実は、昨年の六月で目標の五百人は達成したが白井代表の言われるには五百とはたくさんという意味で終りのない面相数に向かつて、現在は五百五十人になっている。飾り付けだけでも大変である。ところが朗読舞の小林幸枝さんにお叱りをうける。大切な大切な観客さまです。失礼のないように並んで頂いて下さいと。

次に色紙に描いた創作文字、絵手紙、そして「旧石岡市内の寺社を中心とした歴史探訪コース」と題して半紙の大きさの和紙に毛筆で描いた三十八枚の寺社と遺物、風の文庫(会員の小冊子、風の小窓(ことば絵)の展示で準備の完了)。

今回で三回目を迎える風の塾の朗読教室の発表会は兼平良雄の平家物語「屋島」。

ことば座公演は「流海の舞」、今回はモダンダンスの柏木久美子さんをお迎えして、手話舞の小林幸枝さんとのコラボレーション舞。音楽はオカリナ奏者の野口喜広さんとキーボード&パーカッションの矢野恵子さん。三日間それぞれに最高の演技で魅了させてくれた。

朗読教室の兼平良雄は生涯学習をめざして平家物語の原文の解釈に格闘しながらの挑戦で、今回は特に多くの方にご高評価頂いて次回を楽しみにしている。

モダンダンスの柏木さんのつま先まで全身の表現に圧倒、静止の状態でも演技がほとばしっている。小林さんも更に大きな大きな舞いになって、二人の舞いに吸い込まれてしまった。

音楽担当の野口さんと矢野さんは文中に出てくる霞ヶ浦の赤い鯨をイメージして製作した鯨オカリナを中心に舞いと、しらぬひろぢさんの朗読を優しく包み込んでいた。

二日目、十八日午後一時より脚本・演出家白井啓治代表による「言葉と表現(伝える)」について記念講演が行われた。

学校で学ぶ説明文の表現から感動の言葉をそのまま落として文作を楽しんで下さいとの事であった。

チューリップ
もんしろちようと
ともだちだ
のぼりぼう
とおくみえる
さくらの木

2年生

そとであそぶよ

たのしいな

(詩) かねひら りく

孫馬鹿と言われそうですが、私なりに感動した絵を添えて、展示してあったこの詩を引用して、説明的ではない子供の心の発展があつて良いと言葉を頂いた。

旧八郷町のふるさと原風景の中で、皆様のご来場頂ける事が、私達の一番の励みとなります。これからもどうぞよろしくご支援の程お願い致します。

・しあわせの涙 溢れてピンク色 ちきこ

無くならないうちに

伊東ヨ子

雨上がりの夕方だった。汚れを落とした後のサツパリとした気分のところへ風が入ってきた。その日は何時になく素直な二人がお茶を飲んでいた。ゆつくりとした時の流れと穏やかな精神状態に包まれたひとときだった。

「布佐の町は利根川堤に沿って成田山へ行く道を挟んで出来た町だ」と夫は幼い頃の話しを始めた。今日は聞き役に徹しようと思を傾けた。父親は地元の小学校の校舎の設計をし、母親はその学校の教員をしていた。夫が一年生に入るので母は教職をやめたという。昭和十年に生まれ、七年間住んでいた町の一軒一軒をよく覚えていた。母は「懐かしいな。行ってみたいな」といいながら、

・やご：手作りの煎餅を売っていた。

・呉服屋

・はりま屋：味噌、醤油を販売していた。大きな醤油樽が並んでいて店先から奥へトロッコが走っていた。あきちゃんの家だった。

・岡田屋：借家でそこに夫の家族は住んでいた。

入口はガラス戸で父親の設計事務所だった。奥に家族六人の部屋があり、その先は空地。その奥に物置があつてよく入れられたそう。何を仕出しかしたのか。

榎本新聞店があつて、右に曲ると布佐駅だった。

曲らずに行くと、まさ衛門と呼ぶ家がある。

・床屋：同級生がいた。

その並びには普通の家が三軒あつた。その先が、岡田屋敷：岡田竹松という偉い先生の家だった。その人のお蔭で布佐の気象台があり予報が出来たという。図書館もあつて一般の人が出入りして見てもよかつた。よく行って本を見るのが楽しみだったそう。

その先に、きれ所沼があつた。利根川の堤がきれ水が流れ込み田が沼になったのだ。耕作する事もなくそのままだった。この辺りまで家並みがあり向かいの町並みも続いた。

しんちゃんの家も堤に上りきる途中にあつた。

庄衛門とよぶ心天屋があり、店先で子供達は音を立てて食べていた。

・岡田屋：大きな石蔵のある家だった。入口から

ずっと奥まで大谷石の石畳が続いていた。

農家も大きい家が何軒もあつた。

・雑貨屋：ミシンの道具など売っていた。母親に

よく頼まれていったという。

・床屋もあつた。

成田山へ行く道だったので2〜3人、5〜6人が連れ立って歩いたそう。

商売上の看板がその家の呼び名になったり、名のある先祖の呼び名が代々続いたりして呼び合ってきたのかと思つて聞いていた。

二年生になる時荒川沖へと越してきた。町は駅の西口が商店街で、売っている品物の呼び名が多かつたそう。卵屋、万十屋、魚屋、煙草屋、おみや館、陣屋等は珍しい場所だったよう。住居は雑木林の続く東口で草競馬場を通り過ぎ海軍住宅の一画だった。その土地の人からは余所者としての扱いが強かつたという、新開地なので前のことも知らず、人の繋がりもなく面倒でない新しい生活の始まりでもあつたようだが、その反面呼び合つたり、いきいきしていた人達との生活で積み上げてきたものから離された淋しさも隠せなかつたよう。遠くへ何か置き忘れてきたようだったそう。

「じゃあ、今生活しているここはどうだろうね」と口を出した。高崎は霞ヶ浦の水辺にある部落だ。上高崎は台や高浜から山沿いの道、水運、川岸の人の出入りで多くの人の交流があつたろう。文化や産物も豊かだったろうに、今では生活道路は車の通り過ぎる通路となつた。私自身この部落とどれだけ強い繋がりがあるだろうかと思つて理解していく努力はしたい。

さとうや、ほっかいどう、精米屋、自転車屋、上川岸、建具屋、中川岸、上川岸お新宅という名がある。「えび屋」という屋号の家もあつた筈だと聞かれて捜したが解らなくなつていた。

下高崎は漁中心に生活してきた部落だ。銚子、潮来から住み着いた人もいるという。力が強かつ

た。大声での会話が多かった。気が荒いともいうが団結力のある部落だった。私は部落の外れの方に住んでいる精か、本当にこの地域に馴染んで生活しているか心配だ。馴染む事は知る事だと思っただ。この部落の事をより知ろうと努力するつもりだ。

ブリキ屋、ガンガン屋、神田、ざるや、かごや、うなぎや、せんとや、かんきよ、うなぎやの新宅、たんすや、おけや、六百まん等。部落の特徴を表した呼び名、もつともつとある事だろう。消えない中に拾い上げておこう。

生活の場から少し離れると、親しみも薄くなるのか、知っていることも少なくなる。

大井戸では、床屋、わたや、いなや、女池しか解らない。

平山だとかきや、床屋ぐらいだ。

川中子では新衛門だけだ。

岡だとすざ、きたの、ぼつけ、高井、かしわぶち、したてや、いどやなどだ。

田木谷ではとうふや、いどやなどだ。

栗又四ヶはなしやだけだ。

上玉里の広い所ではしゆく、油屋だけだ。ずっと少なくなってしまう。歩いて聞けばきつと解る。今の中確かめておかないと消えてしまう。これからの仕事にしよう、と一人言を言っていると、「古くさい事を根掘り葉掘りつつくんじゃない。いやがる人もいるんだから」という。

「そんな積もりもないもん。私は呼び名や屋号、看板からその地域の歴史や文化が解るといいなあと思っっているの」

と言いつ返してしまった。せっかく良い雰囲気でも過ごしていたのと思ひ、話しを合せて縫った。

それから自分の生まれ育った所の思い出話に移った。

広い上玉里の南側にある小字名、塙、杵山、部屋、大宮の話をした。寺やお宮と深いかわりをもつてきた部落だ。父や母の思い出も入れながら語っている自分もすっかり童心にかえり、楽しかった。夫も懐かしい一人一人を思い出して聞いてくれたし、自分からも話し出していた。

くらやしき、たんば、大工、てっぽうや、山のこし、すみや、じどうしゃや、新田。

わたや、大宮、いなもと。

寺、みなみ、長者屋敷、むかい、入、なこうじ、やまうじ、はつぼうじ、まえのしんや、うらのしんや、あらし、こやま、いどや、かわらや、うちだのしんたく等一軒一軒に呼び名というか、屋号というかついていた。名前を呼ぶ時も「いりやのせつちゃん」。用事を頼まれるときも「かわらやへ回覧板持って行ってこい」というように使われていた。行く先々には石の塀はない。門に扉はなかった。いつでも受け入れてくれる所だった。家にも上がったり、隠れっこしたり、自分の家と変わらぬ出入りしていた。その家の人の顔もよく知っていたし、何処へ行ったかも知っていた。話した。一日遊んで父の声に走って帰ったのは常だった。そんな人の繋がり中であつた呼び名、屋号が暗いイメージのはずがない。呼び名や屋号もその土地の歴史や文化を伝えてきた一つの表現だと思ふ。私が生きてきた、生きている中の、形の一つだから綴っておこう。

なくなるものが多い今、失わないようにしておこう。次の人達がそれをどう選択していくかはおまかせしよう。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第三章 因果応報の範囲(2)

頼朝を捕らえた武士団の頭は彌平兵衛宗清(やひょうびょうえむねきよ)と言う。身なりは変えていたが、少年を一目見て源頼朝くんであることを知った。その時の用事は新たに主君が貰った尾張国の代官として現地へ向かう途中なのだが、尾張国は頼朝の父・義朝の領地であつたから何とも皮肉な話ではあるが、先ず、この武士に捕まったことが「四面楚歌」「絶体絶命」「孤立無援」「天涯孤獨」「茫然自失」「前途多難」と四字熟語だらけであつた頼朝の運命を変え、強いては日本の歴史を変えた。ラッキーカードのお蔭である。

彌平兵衛宗清の主は平清盛の異母弟・三河守頼盛である。宗清は主君から命じられていた任務を勝手に変更し、捕えた頼朝を連れて都へ戻った。心根の優しい武将だったようである。点数稼ぎの武士だと、その場で頼朝を斬り、首だけ干物にして置いて自分の任務を果たしてからぶら下げて持って行くか、宅急便で送るかしたであろう。六波羅へ連れて行けば頼朝は斬られるにしても、宗清は自分で斬ることだけは避けたのである。捕らえられた後で「助かりたいか？」と聞くと、頼朝少年は「源氏が滅びた今は、父を始め一族の菩提を弔う者は自分しか居ないのであるから生きたいと思ふのは当然であろう」と堂々とアンケートに答えた。それを聞いた宗清は先ず、主君・頼盛の母親である池禅尼に頼朝の助命を嘆願してから身

柄を六波羅の平家屋敷に送った。

話を聞いた池禅尼は、捕虜となった少年の様子を聞いた。宗清は「捕らえた時に自害しようとしたので太刀を取り上げました。その後は神妙にしております。お年の割には大人びてみえますが、その面差しが何となく右馬助様に似ております」と答えた。右馬助とは先年に若死にした家盛のことで、平清盛には五、六人の弟が居たが中程の家盛と頼盛は池禅尼が生んだ異母弟である。忘れもしない家盛に似ていると言われた池禅尼は直ぐに清盛の後継者である重盛を呼びつけて、頼朝少年の助命を清盛に嘆願するように命じた。これは難題である。清盛の前に出て渋々物件を切り出した重盛に、清盛は言った。「鹿ヶ谷に集まったような連中ならば兎も角、義朝の子となれば子供でも凡人では無い。ましてや頼朝は父親の義朝が一目置いた息子である。生かしては置けないであろう」これを聞いた池禅尼は泣き叫び、重盛に「そなたの頼み方が悪いからだ」と八つ当たりをする。困った重盛が清盛にお願いを続ける。それやこれやで処刑の日が延びて、その間に頼朝は仏像を彫ったり、お経を口ずさんだり、子供にしては神妙過ぎる日々を送っていたので、流石の清盛も頼朝の死刑を減じて伊豆国へ流罪にした。この時に清盛が妥協せず頼朝を斬っておけば、或いは「平家物語・巻第一」の書き出しから「諸行無常」「盛者必衰」などが削除されていたかも知れない。

「池禅尼」は平清盛の継母、つまり平重盛らを生んだ高階氏女（桓武天皇の孫に当る在原業平の子孫の死後に平忠盛の正室（後妻）となった藤原氏出身の女性であるが、源平合戦の筋書きを大きく変えてしまった程であるから只者では無い。

話は少しさかのぼり、紫式部が藤原道長の娘で

一条天皇の中宮となった彰子の家庭教師をしていた頃に、ライバルの清少納言は定子皇后の後宮に奉仕していた。定子皇后の父親は藤原一族の本流となるべき家系ながら早死にし、皇后の兄もまた野心家の道長に取って替わられたため、この系統は藤原の末流に成り下がってしまった。定子皇后の弟は藤原隆家と言う。公家でも超一流の家柄なのだが型破りで「仏門にある法皇のくせに女性の許に夜這いに行くのはケシカラン！」と花山法皇に脅しの矢を射かけたり、左遷された九州では自ら出陣して海賊を退治したり、武士のような豪快な人物であつたらしい。その藤原隆家からは五、六代目ぐらいになる藤原宗兼の娘が池禅尼で、俗名は不明だが夫の平忠盛と死別して尼になった。

彌平兵衛宗清と池禅尼のお蔭で死刑判決を免れた源頼朝は無期懲役の刑が確定したけれども未だ少年刑務所が無かつたから、大寶律令で定められていた「遠流（おんる）」の刑に処せられた。島では佐渡、隠岐或いは四国の土佐、そして関東では上総が常陸が流刑地の定番である。この場合、島流しが効果的なのだが辺鄙な島では監視が疎かになる恐れがあり、上総、常陸は遠くても目は届くが東国は源氏の地盤であつたからまずい。そこで一流では無かつたが流刑地の一つである伊豆が選ばれた。狭い土地であるから不穏な動きでもあれば直ぐ分かるし、京都から駆けつけるにしても箱根の天嶮を越えなくてすむ。監視は地元の小豪族にさせて置けば良い。伊豆半島の平野部に狩野川が流れていて、その中洲が「蛭ヶ小島」と呼ばれているから、本土でも「島流し」の名目に合う。

永暦元年（一一六〇）三月十一日、源頼朝は一か

月ほど収容されていた牢獄から出され流刑地の伊豆へ連行された。平治の乱で清盛に敵対した数人の公家も同時に阿波や長門に送られたが、頼朝の場合は行先が温泉地なので気分的には楽だったと思う。少年ながら有名人であつたから暇人が見物に集まり、伊豆に向かう頼朝の毅然とした姿を見て「平氏は虎を野に放した」と噂した。

都を離れて暫くすると、源氏に心を寄せていた者たちが囚人護送の列（それ程の人員では無いと思われる）に近寄つて来る。警備員も少ないから相手が武装していなければ歩きながらの会話ぐらゐは黙認している。多くの者は「平氏の疑惑を除くには、髪を下ろして僧に成り給へ」と密かに勧めたけれども、警備員の一人で秩父出身の頼朝に近づき「決うけつげん（ごもりやす）という武士が頼朝に近づき「決して髪など切つてはなりませんぞ：その俣のお姿で前途をお待ち下さい」と耳許でささやいた。これに対し頼朝は黙って頷（うなず）いたと日本外史は伝えている。この者は源氏の家臣であつたが平治の乱には参加せず田舎に居た。頼朝逮捕の噂を聞き、平家のガードマン募集で流人・頼朝の警護に当たつたようである。後に頼朝から褒美を貰っている。

現代は刑務所も「衣食住」が整っているらしいが、昔は其処まで面倒は見えてくれなかつた。粗末な小屋に収容され周りに少しの畑があつて自給自足か、島ならば漁民の手伝いをして網からこぼれた魚を恵んで貰う程度のもので、流された先の地元の人々のお情けに頼る部分が多かつた。勿論、行動は監視付きである。頼朝少年の場合も区別は無いのだが東国は源氏の地盤であり、父親の義朝が根拠地を鎌倉に置いていた関係で伊豆や相模に

土着している豪族の多くが今は平氏に従っていて、も源頼信以来、源氏の息がかかった武士団であるから一般の罪人とは違う。頼朝が流刑地の伊豆・蛭ヶ小島に着くと、同行して来た役人は既に監視人に指定されている二人の在地豪族（伊東氏と北条氏）に必要事項を伝えるや肩の荷が下りて気軽になった様子でサッサと都へ戻って行った。

それを待ち兼ねたように、武蔵国比企郡の豪族で郡衙の高官を務めた比企掃部允（ひきかもんのじょう）の奥さんが奉公人を従えて頼朝が収容された小屋へやって来た。この女性は幼児期の頼朝を育てた乳母であって、源氏の没落を嘆いて尼となっても奥向きを束ねる女丈夫である。成長し且つ九死に一生を得た頼朝少年の姿を見て、思わずその場に泣き伏した。頼朝もまた死線を彷徨つて（さまよって）以来、やつと心を聞くことが出来る人物に出会い、初めて涙を流したのである。

比企尼は、頼朝に一人の武士を紹介した。長女が嫁いだ相手で藤原一族の末流にして武蔵国に土着した安達藤九郎盛長という武士である。その日以来、盛長は頼朝を主君として仕えた。その子孫は鎌倉幕府が北条氏に移って後も重臣となった。頼朝の身の回りの世話は安達盛長が行い、従者も付いた。「住」はマンションまでは無理だが「衣」と「食」は比企尼の差し入れて凌ぐことが出来たので流人と言っても、監視の目を気にしなければ普通の暮らしと変わらない。頼朝も経験の無い畑仕事などをしながら、貧しいが精神的には比較的自由的な日々を過ごしていたようである。

そうして五年経ち、十年経つ間には伊豆在位の武士団とも打ち解けるような間柄になってくる。何よりも比企尼の次女が頼朝監視人の一人である

伊東氏の次男の許に嫁いだことは、頼朝にとって良い結果になる：のが普通であるが、ここで思わぬ因縁というか、因果なのか、誰もが予想できない方向に事態が流れて行く。源頼朝を始めとして歴史的に知られた人物が、それに巻き込まれる。

話の筋としてはそちらの方に続けたいところであるが、時代が少し遡ることになり、内容と人間関係が複雑になるため「後編」として別稿により紹介させて頂く。ここは平氏追討の以仁王令旨が出た為に、思いもかけず迫（せま）つてきた伊豆国に於ける頼朝の危機について取材してみたい。実は、この危機は「平家の流人」として暮らしていた源頼朝にとつては二度目のものであり、最初の危機と言うのが別稿の話なのである。そして、これから展開する事情に依つて「平家打倒」に立ちあがった頼朝には、当然と言えば当然であるが、二度目以降も幾多の危難が襲いかかってくる。

既に述べたよう、各地に蜂起した源氏系武士団は頼朝が「平家打倒」に立ち上がる事を期待している。しかし当時の頼朝は囚人であるが警沢を望まなければ不自由は無い。命を助けてくれた池禅尼の言葉に従って平和に暮らしており、監視の任務に当る北条氏とも親密である。そういう環境下に突如として以仁王の令旨が配達されたお蔭で面倒なことになったのである。京都の三善康信は「早く逃げなさい」と言つて来た。空手形で兵を挙げるか、夜逃げするか「源氏の頭領だ」などと言われても何の役にも立たず「何の因果なのだ」とボヤいてみても虚しい。さて頼朝はどうする…

伊豆と言う地域は特色のある国で、名称の由来は「湯出（ゆいで）らしいが、温泉だけでなく周囲が海に囲まれているため海産物の宝庫であり

石高八万四千石と言われる領地もある。その為に一見して狭いようでも伊豆には幾つかの武士団が定着していた。小さくても一国であるから三島に国府があり、頼朝が流された頃は領主として平家一門が領有していたらしく、頼朝が居た狩野川地域に平家から任命されて来る代官の館があった。代官の館と、頼朝が居た流人の家とは遠くない。それまで七、八年間の代官は令旨を仕掛けた源頼政と関わりのある人物であったから何かと便宜が図られていたが、新たに平氏系の代官に変わった。新任の代官は平氏の威光を笠に威張り散らすような人物であった。この代官の許に、或いは都からの「頼朝殺害命令」が伝わっている恐れがある。

伊豆国の武士団で頼朝の監視を任務としたのは狩野川流域に住む北条氏と、東海岸の現在の伊東市周辺に館を構える伊東氏であった。伊東の分流には宇佐美、河津、工藤などがあり、西海岸には天野、狩野川流域には加藤及び新田などの諸氏が居た。隣の相模国にも土肥、大庭、渋谷などの武士が定着している。それらの武士団はほとんどが平家に従っていたけれども、東国を源氏が押さえていた頃には源氏の武士団であったことは何れも同じである。しかし、もし敵味方に分かれた場合に源平いずれに付くかは全く予想が出来ない。

頼朝の監視役であった北条、伊東両氏のうち、東海岸の伊東氏は話を先送りした事情と言うか頼朝との因果関係によって敵となっていた。その頼朝を北条氏が庇う形であったから伊豆東部は協力が望めない。箱根周辺には平家一辺倒の強敵・大庭氏がいて、三浦半島も動きが読めない。「平家物語」の巻第五には、荒法師として知られた文覚が宮中のカラオケ大会で音程が狂った歌を馬鹿でか

い声で怒鳴り回し、殿中で暴れたために伊豆へ流されて頼朝に謀反を勧めた話が載っているけれども、これは明らかに嘘である。その時に文覚は源義朝の「鬪體（しゅたいこうご）を頼朝に見せて決起を促したというが、そこから「頼朝が十三歳の時の鬪體」が落語に登場したりするから、歴史は面白くなるほど真実から遠ざかる傾向にある。

鎌倉幕府の記録を編年体で綴った歴史書としては「東鑑（あずまかがみ）」に依つてある程度のは分かるのだが、この史料も百分の信用は出来なと言われている。しかし鬪體が出てくるよりはマシなので「東鑑の治承四年（一一八〇）六月」を見ると、大和判官代邦道という右筆（書記）が頼朝に命じられて文書を書き、それに頼朝が署名捺印している。その文書は近辺に居る源氏ゆかりの武将たちで現在は平家に仕えている連中に平家追討を仕掛ける書状である。何よりも罪人である頼朝に殿様並みの右筆が付く筈が無いのにこの様な記録があることから、既に頼朝は北条時政の館に移り住んでいたと考えられる。それは政子との結婚によるものである。

当時の頼朝は政子を連れ、藤九郎盛長を従えて東北方面に逃げるか、それとも周辺の武士団に賭けて決起するか、多分、北条時政を交えて相談した結果、一か八かで戦うほうを選んだのである。複雑な因縁を背負った源頼朝は、どこかの国のお気楽な政党のように「軍備反対・基地反対」だけを念仏にして済ませる訳にもいかなかった。

治承四年六月二十四日、源頼朝が発した「平家討伐への参加」を呼びかける書状が藤九郎盛長に依つて近辺武士団に配られた。先に齋（もたら）された仁王の令旨は見せて貰えなかつた零細企業

の武士たちである。反応は分からないが、二十七日には三浦半島の次郎義澄と千葉の六郎大夫胤頼らが京都勤務から戻った挨拶に北条館へやって来て「源頼朝らの挙兵で東国の武士は疑われ足止めを食つて帰郷が遅れた」と言い、決起への参加を申し出た。心強いことではあるが両名は一族の長では無く、それ程の兵力は期待できないけれども頼朝は嬉しくなって両名と暫く話をした。

七月早々に、頼朝は箱根の走湯山にある権現堂の導師・文陽坊覚淵（もんようぼうかくえん）を呼び寄せ、自分が是まで二十一年間に読破した法華経の八百分部を寄進し「…一千部を転読するつもりですが、思わぬ事情により、それが叶わなくなりまして。志を変えるようでは不意ですが、転読した分を納めます」と申し出た。これは伊豆へ流される前に助命してくれた池禅尼との約束ごとであった。覚淵導師は「一千部に届かなくても、御仏の冥慮に背くものでは有りません」と答えた。そして「貴方は八幡大菩薩の氏人、法華の持者、八幡太郎の遺功を顕す方ですから、法華経八百分部読の功德により、必ずや平家を倒すことが出来るでしょう」と持ち上げた。喜んだ頼朝は「今はお礼も出来ませんが、世の中が落ち着いたならば本日のお布施として蛭ヶ小島の領地を箱根権現に寄進致します」と申し出た。この空手形により箱根山は頼朝の味方になり苦境を救った。

八月に入ると近辺武士団の態度が次第に明らかになってきた。挙兵に参加申し込みをしてきたのは北条一族のほか地元の小豪族が僅かであった。工藤左茂光、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、宇佐美三郎助茂、天野藤内遠景、加藤次景廉それに相模の佐々木太郎定綱、同三郎盛綱などである。そ

の他にも味方に付く者がいると予想はされたが、いずれも兵力の少ない小武士団である。挙兵日時は頼朝と北条時政だけが承知していた。

これらの中で、頼朝が最も頼りにしていたのは宇多源氏で清和源氏とも繋がりのある佐々木一族である。近江国（滋賀）が本領であるが平治の乱で平家に敵対したため領地を失い、頼朝が伊豆に流されたのを聞いて東京都渋谷区の知人を頼つて移り住み源氏の再起を待っていた。昔のことであるから渋谷でも家賃は高くない。その頃、定綱ら兄弟の父・秀義は、頼朝が最も警戒する大庭景親に近づいて耳にした「頼朝殺害計画」の具体的な情報を知り早く頼朝に知らせた。是により事前に分かっていた三善康信の警告が緊急のものであることが分かり、頼朝は最早、戦う以外に危難を避けるすべのない運命であることを覚った。

大庭景親は平国香の末弟・良茂の子孫であり、後三年の役に八幡太郎義家に従つて勇名を馳せた鎌倉権五郎景正の子孫であるから、源平どちらに付くか微妙な立場だが是で明確になった。それが八月十一日のことである。攻めて来る予定の人物は伊豆代官の平兼隆であることが分かっている。代官の許にいる家来の数も威張っている割には少なく、標的の頼朝が北条館に居ることを知っているから加勢の人数を揃えてからでないと攻めては来ない。平家の出動命令次第である。こちらもその間に防衛態勢を整えれば良いのだが…

頼朝と北条時政は、使用人の中で調子が良い渡り者を選びスパイとして代官の館に送り込んだ。危険ではあったが褒美が効いて、スパイは代官館の見取り図やら警備状況、監視カメラの位置までを詳しく報告してきた。敵も募集難で兵力が集ま

らず近々のうちに攻めて来る心配は無いらしい。丁度、八月十七日は三島にある伊豆国一の宮・三島神社の大祭である。常陸国だと鹿島神宮に相当する神社であるから、代官館の若い衆も出かける筈で、警備は手薄になる。「先んずれば人を制す」無理をしても、此方から攻めて行くことにして八月十七日の夜、テレビのゴールデンアワーの時間帯に襲撃することが決まった。

その決定を受けて、襲撃の作戦会議を開く予定の八月十三日に、頼朝が頼っている佐々木太郎定綱と弟の三郎盛綱が渋谷まで武器を揃えに戻ると言った。当時から渋谷が賑やかで武器を売っていたかどうかは分からないが、確かに佐々木兄弟は確な武器を持っていない。しかし頼朝は不安になったので十六日迄には必ず戻ってくれと頼んだ。十五、十六の両日は雨が降り続き、夜になっても佐々木兄弟は戻らなかつた。佐々木一族が世話になつている渋谷庄司重国にも決起の勧誘をしたので或いは寝返りをされたかと頼朝は後悔をした。渋谷氏は平家に恩のある人物であり、結局は敵に回つたのだが佐々木一族の立場を理解して、佐々木兄弟は伊豆での合戦の後に渋谷庄司重国の許を訪れ別れの酒を酌み交わしている。

一方、今は一刻の猶予も出来ない頼朝のほうは、計画通りに襲撃を行うこととなつた。八月十七日は朝から晴れ上がった。大事決行の日ではあるが三島神社の祭礼でもあるから、頼朝は藤九郎を代理人として参拝させた。午後三時近くになつて、定綱以下佐々木四人兄弟が到着した。名門の武将なのに二人は貧弱な馬に乗り、弟二人は徒歩で鎧兜も安物しか着けていない。それを見て感激の余り頼朝は涙を流し「汝らが来ないので今夜の合戦

が出来ないかと心配でならず、遅参を恨みに思う」と愚痴をこぼした。定綱は、途中で洪水に遭い、何としても通行出来ずに遅れた旨を述べて謝つた。こうして源頼朝は決起したのである。

「平家打倒」などと景気の良いスローガンではあるが、端的に言えば時の権力への反逆であるから地方では其れ程のお客さんは集まらない。この襲撃の後に相模国へ進んで石橋山（小田原と真鶴との中間）に布陣した際にも頼朝軍は騎馬武者が五十騎弱、徒歩の兵が三百人程であつたらしいから、代官館を襲つた時にも兵力は少ない。北条時政父子、佐々木三兄弟、土肥實平、岡崎義實、加藤景廉らで八十余の軍勢が攻め寄せた。残つた武士たちは北条館に残り、頼朝の周りを護つた。

襲撃が成功し、伊豆に於ける平氏の象徴である代官を討ち取つた場合には先ず敵の館に火を放つ約束であつた。代官館が燃える火は北条館からも良く見える距離で有つたらしい。頼朝は廊下から中空を見ていたが予想した時間になつても火事は見えない。攻め込んだほうは相手があることなのでそう簡単にはいかない。シビレを切らした頼朝は馬屋番に命じて木登りをさせ東の空を見張らせていた。やがて空が赤くなり遠く消防車のサイレンが聞こえて、襲撃の成功を知つたのである。

治承四年八月十九日、その気になつた源頼朝は伊豆国の人々に対して「此の国は平氏の支配から脱した」と宣言し、役人の無理難題、権力の行使を禁止した。鎌倉幕府の政治始めである。ところが合戦の間中、政子夫人らが避難させて貰つていた伊豆・走湯山の僧兵などから「合戦の際に北条方の兵たちが山で乱暴を働いた」と訴えがあり、慌てた頼朝は自筆で詫び状を書き合戦が収まつた

後には莊園を寄進すると約束している。

これが日本の歴史上、大きな位置を占める「鎌倉時代」の惨めなスタートであり、壮大な歴史も些細なことの積み重ねであることを示している。

偉大なる歴史の主人公も、所詮は人間的な低次元の因縁に縛られて、右往左往しているのである。

尤も源頼朝の場合は奥方の北条政子が強烈な嫉妬心の持ち主であり、背後には北条一族が居たから妙などころで気を使う必要があつた。実はそれにも複雑な事情があつて一言では語り尽くせない。

八月二十日になると三浦半島の豪族・三浦介義明から連絡が有り、嫡男の義澄に一族郎党を率いて駆けつけさせるよう命じていたところ、陸路は敵を避けなければならず、海路は風波に煩わされることで伊豆到着が遅れていると、詫びてきた。三浦氏も桓武平氏の流れを汲む名族であり、始祖は平国香の庶弟・良茂（説では良文）だとされている。この一族は鎌倉幕府で重きをなし、戦国時代に小田原の北条早雲に滅ぼされるまで、三浦半島に勢力を保持していた。

この様に「源氏」「平氏」と言う区分は何処で分かれ、何処で敵味方になるのか複雑で曖昧であり、八幡太郎義家のように源平両氏の血を引く武将もいた。結局は、過去の従属関係を何処に繋げるかに依つて敵・味方の関係が成立するようである。「日本外史」の書き出し（源氏前記・平氏）によれば、鳥羽天皇が諸州（諸國）に居る武士たちに「俺は源氏だ」「俺は平氏だ」と言つて、猿山のようにボスの許に群れることを禁止したらしい。

この天皇は五歳で即位したのだが、その時代辺りから武士の存在が目立つようになり、この天皇の崩御を機に「保元の乱」が起こつた。それが「平

治の乱」に繋がり、武士の平清盛が天下を取ることに
なった。鳥羽天皇は、そういう事態を憂慮して
いたのであるが、猿の子孫である人類は何か
あれば祖先に倣って（ならって）群れたがるから、
それを禁止することは難しい。八百年以上を経過
した現代でも、国政に携わる人たちが政治理念や
国益を無視して、個人的な因縁やらしがらみなど
の低俗な因果関係だけで群れて騒いでいる。

話を治承四年に戻すと、強力な助っ人となる相
模の三浦一族が味方に着くことが分かったので、
源頼朝や北条時政らが相談した結果、取り敢えず
伊豆を捨てて三浦氏などを頼り相模国へ移ること
にした。伊豆半島の付け根、温泉で知られた湯河
原が土肥氏の地盤であったことから取り敢えず、
其処に拠点を移し、相模国内の武士団が味方に付
いてくれることを期待した。海に面した土肥に移
ったことで、やがて合戦に負けた頼朝たちが安房、
上総（千葉）へ脱出できることになる。なお土肥氏
も桓武平氏の末流（平良文流）だと思われる。

八月二十日、頼朝に従って相模国に集結した武
士たちは次のような顔ぶれであった。（東鑑）
北条四郎（時政）、同三郎（時房）、同四郎（義時）、
平六時定、

藤九郎盛長、

工藤介茂光、同五郎親光（宇佐美を含め狩野一族）

宇佐美三郎助茂、同平太政光、同平次實政、

土肥次郎實平、同弥太郎遠平、

土屋三郎宗遠、同次郎義清、同彌次郎忠光

岡崎四郎義實、同余一義忠、

佐々木太郎定綱、同次郎経高、同三郎盛綱、同四

郎高綱（四兄弟）、

天野藤内遠景、同六郎政景、

大庭平太景義（弟の景親は平氏に恩が有り敵対）、

豊田五郎景俊、

新田四郎忠常、

加藤五郎景員、同藤太光員、同藤次郎景廉、

堀藤次親宗、同平四郎助政、

天野平内光家、

中村太郎景平、同次郎盛平、

鮫島四郎宗家、

七郎武者宣親、

大見平二家秀、

近藤七国平、

平佐古太郎為重、

那古谷橘次頼時、

澤六郎宗家、

義勝房成尋、

中四郎惟重、中八惟平、

新藤次俊長、

小中太光家、

他に、これらの武士に従う郎党たちが居た。

八月二十二日になると、待望していた三浦一族
は三浦次郎義澄に率いられ船で土肥に向かっ
ていくことが分かった。

三浦十郎義連、

大多和三郎義久、同義成、

和田太郎義盛、同次郎義茂、同三郎義實、

多々良三郎重春、同四郎明宗、

筑井次郎義行などと郎党である。これである程度
の軍勢が揃うが到着はいつになるか分からない。

八月二十三日は曇り空で天気予報は夕方から雨
と報じていた。既に源頼朝+北条氏の謀反は近辺
の武士団に知れ渡っており、平氏からは反逆者討
伐の命令が出されているから、真面目な武士団は

敵になって出陣してくる。頼朝の味方に付いたの
は地元の中小企業もしくは零細企業の武士たちで
軍団の数としては騎馬武者が三百騎余に若干の郎
党たちが従う程度である。頼朝は拠点としていた
湯河原近辺から移動して石橋山に陣を布くことに
した。夜明けを待つて午前五時頃には現地へ向か
ったのだが敵となる近辺武士団の連中はその動き
を読んで、既に小田原側の山麓に三千騎を揃えて
待っていた。背後から伊東の軍勢が追ってくる。

石橋山は東海道新幹線が小田原から五キロほど
下った地点で、左手の相模灘が箱根山系の東北部
山地に接する辺りの森林である。「山だ！」と威張
る程のものではないが、北東部の山麓を抑えられ
ると東側は海と崖、西と南は山で逃げ場がない。
敵に先手を打たれた頼朝たちは「袋の鼠」状態に
なったのである。ただ攻める側にしても、救援の
三浦軍が上陸してくれば挟み討ちに遭う。両軍の
対峙が続く、その日は日暮れと共に雨になった。

平家方軍勢の中心人物は、頼朝が最も警戒して
いた大庭景親である。救援にやって来る三浦一族
の到着前に反乱軍を潰そうと、雨と夜の闇を利用
して大軍で石橋山を囲み込み、一気に押し寄せる
戦法で攻めてきた。寄せ手には大庭景親のほかに
次のような武士が加わっていた。

俵野（またの）五郎景久、河村三郎義秀、渋谷庄司

重国、糟谷（かすや）権守盛久、海老名源三季定、

曾我太郎助信、瀧口三郎経俊、毛利太郎景行、長

屋新五為宗、熊谷二郎直實、稲毛三郎重成、岡部

六彌太忠澄などであるが、兵力は頼朝側の十倍で

あるから景気が良い武士団だったらしい。ただ、
これらの武士の多くは程なく九死に一生を得て勢
いを盛り返した頼朝に降伏している。石橋山の合

戦中にも大庭景親の家臣で飯田三郎家義という者が、追い詰められた頼朝を逃がす為に自分の部下を主君の景親に嫉（けし）かけているし、血戦の果てに敗れて洞窟に逃げ込んだ頼朝主従を、大庭軍に加わっていた梶原景時が見つけながら見逃してくれた話は有名である。

つまり中小武士団は、源氏、平家のいずれに主従の恩義を感じているか微妙な差で行動しているものであり、時流としては平家が力を持ち過ぎていることへの反発が強まっていた。漠然とした「反平家」の気運が高まる中で、先ず言い出した源頼政は仁王のラインが呆気なく潰れ、そのトバッチリを受けて止むを得ず決起した源頼朝は北条時政のラインも全滅の危機に瀕したのである。

雨中の暗闇で死闘が展開された結果、夜明けまでに頼朝の目の前で多くの武士が討たれ、部隊は壊滅した。石橋山中の残党狩りを逃れた者たちはそれぞれに戦場を離脱したが、頼朝は土肥實平らと居て進退極まり「これが最後」と覚った。此処で頼朝が消えれば幾つかの些細な抵抗運動として多分、歴史にも残らなかつたと思うが、不可思議な因縁を背負わされている源頼朝は自殺をしようとして土肥實平に止められたのである。

正確に言うとうと實平は自殺を止めたのではなく、武將の自殺の方法（礼儀作法）を教えようとした。絶望した頼朝が鎧兜を脱いで適当に死のうとしたので「お覚悟なされた上は、故実が有りますからそれに従い、大將軍に相応しくなされませ」と言つて、松葉を敷いて切腹の場を拵えたりしているうちに、味方の加藤景廉や宇佐美實政ら数人が頼朝の無事を見つけたから、ニコニコしながらやってきたので自殺する雰囲気では無くなつた。

合戦が始まる前に頼朝は数珠と銀の観音像を持つていた。観音像は頼朝が幼い頃に乳母（比企尼と思われる）が清水寺に参籠して授かつたもので成長した頼朝に渡つていた。それを頼朝は鬚（もどり）髷の中へ結び込んでいた。自殺を覚悟した程であるから、万一のことを考えて「大將が仏像を持つていた」などと言われるのが悔しいと山中に在った岩の間に隠し祀つた。数珠は合戦の間に紛失したので、頼朝は残念がつていた。

因果応報がテーマの話で都合良く出来過ぎるが数珠は先ほど頼朝の危機を救つてくれた飯田三郎家義（敵将・大庭景親の家臣）が拾つて届けてくれたのである。ついでに家義は味方に加わつた。この場合でも頼朝が九死に一生を得たのは飯田家義のお蔭なのだが、観音様と数珠のお蔭だと強調したほうが因果応報の話としては都合が良い。

雨で暗闇の、然も山中の狭い坂道で行われた戦さであるから一氣に勝負はつかないが、兵力が少ない頼朝軍は次第に山頂に追い詰められ、そこからは各個バラバラに峯伝いで箱根山中へ逃げ込むしかない。北条一族は戦い疲れて山頂まで逃げ込めず闇に逃れた。頼朝らは一旦、集まつた後に石橋山から続く杉木立を利用して四方に散つた。

頼朝は土肥實平らと箱根へ逃れ、一旦は箱根山中の寺に匿われた。ところが住職の弟の僧侶は、頼朝たちが退治した伊豆代官お抱えの祈祷師であったから、兄の僧侶は弟が平家方の武將に密告することを案じて事情を説明した。一同は合戦の疲れを癒す間もなく箱根から逃れて土肥経由で真鶴岬から船で安房（房総半島）に逃れた。小さな船であったから速度も襲い。ノロノロと相模湾を渡つて行く途中で大きな船に行き会つた。

一方、救援に駆け付けた三浦一族は海岸沿い七、八キロ手前の酒匂川辺りまで進んで来たところで石橋山合戦が始まつてしまい、其処で「既に反乱軍は壊滅し、頼朝公は戦死した」という情報に接して引き返す途中から平家方（後に降伏してくる）の畠山重忠に攻められ激戦となつた。一旦は追いつたのだが、新たな勢力として江戸、秩父、川越などを味方にした大軍に攻められ、居城を失つてしまつた。その時に、当主の三浦義明は八十九歳で年金の台帳も不明扱いになりそうな年齢で戦つた。城が落ちて逃れる際に足手まといになるからと、城と運命を共にしている。その時に同行を懇願する三浦義澄たちに「頼朝公を護れ、心残りはお公（頼朝）の大業を成すを見ざるのみ」と遺言している。三浦一族は、やむなく兵力を纏め船で安房へ向かつていた途中の海で頼朝の乗つた小船と一緒にしたのである。

三浦一族の方は大船であるから小船に出会つてもビックともしないが、小船に乗つて頼朝に従っている土肥實平、岡崎義實らは必用以上に警戒して頼朝を船底に隠してしまつた。出会つたのが三浦の船なので少し安心したが、三浦義澄から「頼朝公は如何に？」と問われても「我々もお探しており申す…」などと答えていた。義澄は「我々が父親を捨てて城を後にしたのは、頼朝公にお目にかかりたい一心である」と涙で語つた。それを聞いた頼朝は堪らずに隠れていた船底から這い出してきた。頼朝の無事な姿を見た義澄は「父親は最後の言葉で頼朝公は必ず無事におわす、と申しておりました。今、こうして御無事でお出でになることは正しく父親の遺言どおりです」と又も涙にくれた。頼朝も三浦義明の忠節を聞き号泣したの

である。かくして大船小船共に安房に向かった。

治承四年八月二十九日、源氏の船団、と言うのも恥ずかしいが、何艘かの船に乗って源頼朝以下、土肥實平、岡崎實平らと三浦一族の武士たちは安房国に到着した。現在の鴨川市沖にある仁衛門島には頼朝が隠れた伝説があるから、其の近くの浜に上陸したのだと思うが「東鑑」は土肥實平と共に安房国平北郡狹島（かりのしま）に上陸して北条時政らの出迎えをうけたと記録している。他の武士たちは上陸しても、頼朝は現地の状況が分かるまで無人島にでも隠れていたであろう。

安房国は房総半島先端部で現在の館山市に国府があった。幸いなことに安房国在住の安西三郎景親は、頼朝が幼い頃に守役のような立場にあった武士であるから、頼朝が流れて来た？と聞いて真っ先に飛んできた。九月初めには下野、常陸から小山朝政、下河辺行平（右衛門近辺の領主）らが来て護ったので頼朝の安全は確保された。一行は隣国の上総国へ移動している。此処では事前に藤九郎盛長が説得に当り桓武平氏・良文流で国司に次ぐ地位にある大豪族の上総介広常が源氏に付いたのだが、広常が連れて来た兵力が半端では無い。頼朝が思わず算盤を出したほどの大軍である。

程なく、六月頃に京都帰りの挨拶に伊豆へ来た六郎大夫胤頼が、愚図る父親を説得したので下総国の千葉氏（常胤）もやって来た。此の人も上総介と同族の桓武平氏であるが、現在でも千葉県として名前が残る大豪族である。こうして、夜逃げ同然に相模国から流れて来た源頼朝は、どこでどう間違えたのか僅か数日の間に大將軍になってしまった。房総半島で頼朝の名前が知られていた訳でも無かるうから、上総介広常や千葉常胤らがそれ

なりの努力をしたのである。平氏から任命された地元の役人は抵抗して攻められた。

この時に源氏勢力の足元を見た訳では無いが、大軍を率いてきた広常の態度がデカかった。そこで頼朝はわざと面会を遅らせて威厳を示したという話が伝わっているが多分、嘘であろう。御世辞は言わなかったにしても心中の嬉しさを隠しきれない頼朝である。やがて源氏再興が成った後に上総介広常だけは、頼朝の前でも馬から降りずに挨拶が出来る特権を主張した。尤も、それが原因と思われれることで広常は消されているから世の中は何がどうなるか、その因果関係は計り知れない。権力を握ってからは、頼朝は名の有る武将だけでも百何十人かを粛清しているそうで、その中の上総介広常と三河守範頼と一条次郎忠頼の三人だけは無実であったと後から気が付いたらしい。

広常が消された直接の原因は「上総一の宮に頼朝呪詛の祈願をしている」と噂されたことである。広常の威勢を妬んだ者が企んだらしいが猜疑心の強い頼朝は事実を確かめもせず――正確には本人を殺害してから調べたところ奉納されていた鎧には「頼朝公の武運長久を祈る」と書かれていた。それを聞いた頼朝は慌てて、広常の首と胴とを繋いでみるように命じたが、斬ってしまったものはドウにもならない。源氏再興の最大功労者とも言ふべき広常が神社に祈願をしたことで無実のまま斬られたのでは、お参りに行く人が居なくなる。そこには何か現世での因果関係が源頼朝と上総介広常に介在しているのではなからうか？それについて少し後でのべることにする。

兎も角、房総半島の有力な豪族たちが次々と味方に付いてくれたお蔭で石橋山の敗戦から僅か一

ヶ月と一週間ほどで源頼朝は源氏の拠点であった鎌倉に入ることが出来た。各地に潜んでいた石橋山の残党も集まり江戸、畠山ら一旦は敵対した関東の武将たちも次々と頼朝の軍門に降り、また甲斐源氏の勧誘に出かけていた北条時政は武田信義らの軍を伴って戻ってきたので、源氏の勢力は二十万騎と誇張されるように膨らんでいた。こうした状況は石橋山で頼朝らを粉砕した大庭景親らによって京都に報告され当然のことではあるが平清盛を激怒させて直ちに討伐軍が差し向けられた。

「…己れ頼朝め！謀反人として誅罰すべきところ池禅尼の嘆願によつて命を助け、流罪に致した恩を忘れ、当家に弓を引いたか…このような所業を神が許される筈が無い。必ずや天罰を蒙るぞ！」怒り心頭に発した清盛は、これで頭に血が上り憎い頼朝に天罰が下るのを確認できず、程なく自分のほうが天罰に当たったように他界してしまった。

清盛の怒りを象徴する平家の遠征軍は治承四年十月二十日に富士川まで到達した。十万余の兵力と言われているが、其の中で最初から平家が引き連れてきた軍勢は三万しかいなくて、残り七万は都から関東へ来る間に徴発したか借りてきた連中である。東海道も高速道が無かった時代であるから先頭は富士川に着いても最後尾の兵は未だ四〇キロも西の宇津の谷峠辺りにウロウロして居る。

平家軍の総大将は清盛の孫（嫡男・重盛の子）平維盛（これもり）であり、副将として清盛の異母弟で平家物語の巻第一「鱸（すずき）の事」に出てくる優雅な女房が生んだ薩摩守忠度（ただのり）が付き、侍大将（重監・参謀）には平忠清が清盛の命令で付いていた。このオジさんが中々の強情者で遠征に出かける前に出発日を何日にするかで、総大将

の維盛と喧嘩をして一週間の無駄にしたと言われる。そればかりか富士川の合戦の前に当時の作法に従って戦闘開始の日時を打ち合わせに来た甲斐源氏の軍使を斬ってしまった。甲斐源氏も怒ったが、寄せ集め同然であった平家軍にも逆に動揺が起こった。何しろ諸国では源氏ブームが起きていて、平家に味方してくれる武士団は貴重な存在になっっている。そう言う時期に鬼のような上司がいる平家軍団は、誰もが目に見えない恐怖心で戦意を喪失していたのである。

これから合戦をする源氏の兵力は数十万と言う噂が広まり、平家の軍勢は戦わずに一斉に崩れ逃げ帰った。情報を分析して撤退を決めたのも平忠清である。歴史上では、富士川の合戦は川岸を飛んでいた水鳥の羽音に驚いた平家軍が敗走したと言われているが、水鳥にすれば平家軍に恨まれるから訂正して貰いたいと思っっている。総大将の維盛は、さすが平家のお坊ちゃんであるから合戦に来るにも着せ替え人形のように贅沢な鎧を何領も持ってきたのだが、着替える暇が無かった。尤も逃げる途中で着替えたかもしれない。

水戸の馬場系大掾（たいじょう）氏が君臨して居た関係で、桓武平氏に思い入れが深い石岡の皆さんには内緒にして置きたい話なのだが、富士川の合戦で平家の敗因をつくったような平忠清というのは悪七兵衛を名乗った平景清の父親である。景清は平家物語の巻第十一「弓流しの事」に登場し、歌舞伎でも出し物「鍛（じこ）引き」で知られた人物であるが、平家が敗れた後に頼朝に自首して八田知家に預けられ、飲食を絶って死んだと伝えられている。その場所が石岡であるとする碑が建てられている。九州墓所説もあるようなので何と

も言えないが、普通に考えると、自首して飲食を絶つくらいならば最初から出て来なければ良いように思える。屋島での鍛引きは事実かも知れないが後に演劇の世界で有名になり、伝説的なもので有名になった人物である。それは兎も角として忠清、景清共に「平氏」を称しているが本姓は藤原氏のものである。伊勢国に住み、平貞盛の系統が伊勢国で勢力を広げる段階で平氏に服属し代々の家人となって平姓を許されたらしい。国文学の研究者が系図を調べておられる。

話が逸れたが、富士川の合戦で大勝した（…）と言えるかどうか疑問はあるが、兎に角、平家を追い払った源頼朝は、その勢いを駆って都に攻め上ろうとした。これに対して東国の武将たちは、先ず東国を完全に支配することが先決であると進言をした。彼らが案じていたのは常陸国に隠然たる勢力を誇る北部の佐竹氏と南部の大掾（たいじょう）氏である。佐竹は清和源氏、大掾は桓武平氏の源流であるから、通常ならば大掾氏の征伐を考えるのだが、何の因果か世の中は素直にいかないもので、当時の頼朝に桓武平氏系の諸豪族が従っていた関係もあって、筑波山麓一帯に勢威を誇り常陸国府に君臨していた多気大掾氏はあつさり従ったのに源氏の佐竹氏が「ノー」と言った。

頼朝は武田信義に駿河国（静岡東部）を守らせ、武田一族の安田義定を遠江国（静岡西部）に配してから黄瀬川（沼津東方）まで戻った時に奥州からやって来た源義経に会う。一旦、鎌倉に還った頼朝は急に多忙になった。それまで平家に味方していた武士たちが次々と降伏してきたのである。その連中を一人ずつ勤務評定して「首を斬るか」「家来にするか」簡単明瞭な判決を下してから、

十月二十七日に常陸国へ向けて進軍を開始した。目的は佐竹氏討伐である。頼朝のほうは自分の都合だけで攻めて来たのだが、佐竹氏には簡単に「源氏に従います」と言えない事情があった。当主の佐竹隆義が平家に従って京都に居たのである。頼朝が来たことは石岡市史にも書いてあるが、

「佐竹系譜」を見ると裏の様子が分かる。概ね次のような事情であった。佐竹氏が常陸国に来たのは隆義らの父・昌義の時代であるが祖父・義業の代から水戸に居た常陸大掾一族・吉田氏と姻戚関係にあった。昌義は吉田氏の娘を母としている。

天承元年（一一三二）、昌義は、石岡市の金刀比羅神社にも祀られている崇徳天皇の命令で治安回復任務を帯び、小豪族の対立で混乱が続いていた常陸国の奥七郡へ主従十人足らずでやって来たのだが余所者であるから住む場所も無くて小さな観音堂に間借りをしていたと伝えられる。

それから徐々に常陸国に土着する段階で桓武平氏・常陸大掾一族には一方ならぬお世話になっていたのである。（それなのに佐竹氏は大掾一族を食いつぶした―始祖の新羅三郎義光が評判の悪い人物であったと伝えられるから、その遺伝かも知れない…）そう言ったことで佐竹昌義は保元の乱、平治の乱でも平清盛方に付き、息子の隆義も平清盛に就職を世話して貰ったりしたので急に源氏の景気が良くなったからと言って平家を見限り乗り換える訳にもいかなかったのである。源頼朝は一週間ほどで石岡に到着し、国府の館に入った。

【風の談笑室】

ふるさと風の会5周年展も無事に終了した。忙しい中時間を割いてお出かけ下さった皆様には心よりお礼申し上げます。

私達としましては、5周年展というよりも次のステップへの出発展と考え、5年間の活動を振り返って次への課題をそれぞれに捜すという思いの強いものであった。

同時に行われた兄妹グループことば座の第20回公演は、モダン・バレエの柏木久美子さんをお招きしての舞のコラボレーションであった。磨赤児、天児牛大といった現代舞踏を観た事のない人が大半であったろうと思うので、彼らの舞踏とは全く違うが、柏木さんの舞には圧倒されたものと思う。

詩の朗読にのって、詩の言葉の持っている風の姿を舞として創り上げていく柏木さんの世界に多くの皆さんは魅了され、驚嘆されたと思う。稽古の終盤になったころ、朗読という言葉の風に舞うことの面白さが分かってきたと話されていたが、毎日の柏木さんの愉快な心模様が舞として紡ぎだしていく姿は、小林幸枝にも大きな影響を与えて貰った。

初日、二日目などは、小林の感情が空回りと暴走する様子が見られたが、大変良い勉強となったであろうと思う。これまで指導しながら、小林の突然の発展にもまごつくことはなかったのであるが、柏木さんを見ての思わぬ発展には小生も嬉しい悲鳴を上げることとなった。

今年のことば座は、大きな転換期を迎えていると言っても良いだろう。

2月に美浦村の陸平をヨイシヨする会の招きで朗読舞を披露することになったのであるが、その時に柏木さんから小林と一緒に舞ってみたいとのお話を頂き、それに次いで今回の共演で、小林には大きな学びを貰うことができた。

この柏木さんとの共演に端を発し、小生の念願であった、出来るだけ「地元の人達によるふるさと物語の表現」に一步近づき、石岡市旧八郷地区出身で声優をやっている永瀬沙知さんの参加を頂けることとなった。

9月11日にギター文化館のコンサートシリーズとして行われる「里山と風の音コンサート」に新作民話を永瀬沙知さんと小生が朗読することになった。永瀬沙知ちゃんにはいずれ朗読舞への朗読を創り上げていただき小林幸枝との共演してもらえらることを楽しみにしている。

ことば座の公演と言えば、もうオカリナの野口喜広さん、パーカッション・キーボードの矢野恵子さんは欠くことの出来ない重要メンバーであるが、11月の定期公演ではギター文化館ならではの、クラシックギターの演奏との朗読舞を企画している。

参加して頂けるギタリストは、ギター文化館でも専任講師をやられている牛久出身の大島直さんである。今、大島さんには、恋物語をイメージして、自分の恋物語として演奏してみたいと思う曲を何曲か選定してもらっているところである。大島さんの思い描く曲に対する恋物語を聞かせてもらい、その曲をベースに、常世の国の風景をモチーフに、物語と舞詩を書こうと思っている。小生も初めての試みなので、大島さんから提示される曲を心待ちにしている。

《ふるさとの》

ピザ・パスタ・アレンジ書交・書交会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「つらつら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-44-60000

ふるさとルネサンスに始まり、その組織は消滅したが、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考えようと集まった数名の会であった当ふるさと風の会とことば座ではあるが、会報を出し始めて5年が過ぎて6年目をスタートさせた。おかげで漸く小さいながら風の流れを起し、渦を回転させ始めた。これこそが「継続の力」というものであると思う。

9月11日の野口さんとの「里山と風の音コンサート」では、野口さんは『土笛(オカリナ)が奏でる(5億年 生命の旅)』と題して日本最古のカンブリア紀の地層(日立市)から頂いた一握りの命のかけら(土)から作った土笛で演奏される。小生と永瀬沙知さんは石岡の文化の始まりである龍神山とそこから流れ出る川を握きとめて作られた柏原池に纏わる伝説を新説として書き下した「新説柏原池物語」を朗読しようと考えています。(ひろち)

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-keze.com/>

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

第2回 里山と風の声コンサート

3月6日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男白井啓治と常世の海と陸に魅せられ大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する夫(つま)野口喜広と妹(いも)矢野恵子が出会い一緒に風に声することになった。

第一部『土笛(オカリナ)が奏でる《5億年 生命の旅》』

日本最古のカンブリア紀の地層(日立市)から、一握りの生命のかけら(土)をいただき、土笛として奏でる。土笛は何を語るのか…?

《演奏曲目》海はふるさと、カンブリアの夢、モンゴルの風、荒野、グレートスピリッツ、旅立ち、浜辺の歌 他。

《演奏者》野口喜広(オカリナ) 矢野恵子(キーボード) 及川克洋(ウッドベース)
田中文彦(ギター) 山下亮江(パーカッション)

第二部『朗読ふるさと物語《新説柏原池物語》』

ふるさと石岡に伝えられてきた龍の伝説に、新しい命を吹き込むべき新解釈で脚本家白井啓治が書き下した物語を、作者本人と石岡市(旧八郷)出身の声優永瀬沙知が鎖連読というスタイルで語ります。

ギター文化館 Tel 0299-46-2457
Fax 0299-46-2628

コンサート料金 入場券 ……………3,500円
(事前にご購入の場合は3,000円) 小学生 2,000円

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

第21回公演(11月11日~13日)は

「常世の国の恋物語百:第28話」としてギタリスト大島直氏を招き、「湖の弦音(仮題)」をお届けします。モダンバレエの柏木久美子さんとの共演で一回り大きくなった小林幸枝の舞にご期待ください。

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150